大学生による不登校支援についての検討

玉木健弘
福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：不登校支援，大学生，小中学生

はじめに

不登校児童生徒数は，ここ数年減少傾向にあるといわれている。文部科学省(2006)の調査によると平成7年度から平成17年度の10年間で，もっとも不登校児童生徒数が多かったのは，平成13年度の138,722人であった。その後，減少していき，平成17年度は122，255人となった。これを小中学校別に見ていくと，平成13年度の小学校における不登校児童数は，26,5111人，中学校では112,211人であった。次に平成17年度について見ると，小学校では22，709人，中学校では99，546人となり，小中学校で不登校が減少傾向にあることが示された。しかしながら，小中学校に在籍している児童生徒数も減少しており，不登校児童生徒数だけを見て，不登校が減少したということはできない。そのため，平成13年度と平成17年度の不登校児童生徒数の割合について検討すると，平成13年度の小学校で275人に1人，中学校で38人に1人であった。また，平成17年度の小学校では317人に1人，中学校で36人に1人であった。割合だけを見てみると，平成13年度と平成17年度の不登校児童生徒数については，小学校では，減少傾向にあるといえるが，中学校では，大きな違いはないことがいえる。このことから，不登校問題は，ここ10年を見ても大きな変化がみられていない。しかしながら，不登校を支援するための試みは，数多く行われている。その一つにスクールカウンセラーの配置があげられる。スクールカウンセラーとは，児童生徒の不登校，暴力行為，ならびに非行といった問題行動の対応や保護者や教員への支援を目的として全国の中学校に配置されている。スクールカウンセラーは，平成7年度の154校から始り，相談体制が整備されるにしたがって，配置校も増え，平成17年度において，約1万校の中学校に配置されるようになった（文部科学省，2005)。そのため，問題行動について，学校内で相談できる機会は，増えてきているが，必ずしも全ての問題行動の相談を受けるわけではない。例えば，不登校は，学校に行きたくないと思っている児童生徒が，学校に行くための方法をカウンセラーに相談に来るということは，ほとんどないのが現状である。そのため，カウンセラーは不登校になったあとに，児童生徒と関わることが多くなる。不登校の児童生徒に関わることは，不登校支援では重要なことであるが，時間がかかり，効果も不透明である。また，カウンセラーと不登校児童生徒との年齢が，離れており，児童生徒にとって気軽に話ができる存在になりにくいということが考えられる。そのため，年齢的にも近い，大学生による不登校支援が行われるようになってきた。

大学生が行う不登校支援として，まず，メンタルフレンドがあげられる。メンタルフレンドとは，不登校児童生徒の家に行き，一緒に遊んだり，勉強したりする役割を担い，不登校児童生徒の心理的な悩みや葛藤を和らげることを目的としている。また，不登校児童生徒を対象としたキャンプに，大学生がスタッフとして参加することも不登校支援の一つである。不登校児童生徒を対象としたキャンプの目的は，児童生徒に強い意志を持ってもらい，自主性，主体性を育み，困難に打ち勝つ強さを身につけるということが含まれていると考えられる。しかしながら，多くのキャンプは，年に1回実施されるだけである。確かに，年に1回の実施でも，児童生徒は成長し，これまでとは違った一面を見せることも考えられ，意義あるものだといえる。だが，単発で実施されるため，継続的な成長という面では，不十分であると思われる。例えば，1回の参加によって，心理的変化が出てきたとしても，その後の関わりがな

ければ，さらに心理的に成長することができないと思われる。野外キャンプの長所は，日常生活とは違うことを味わうことやキャンプでしか関わることがない人とのふれ合いである。そして，キャンプに参加することで，児童生徒は，様々なことを感じたり，考えたり，体験することで，多くのことを学びことができることである。また，指導者やスタッフが，児童生徒と年齢的にも近ければ，話しやすく，あまり緊張せずに関わることができると思われる。そして，その関係性の中で，自分の考えや思いを話すことができれば，児童生徒の心理的な成長にもつながると考えられる。そのため，本研究では，不登校児童生徒を対象としたキャンプを通して，大学生による児童生徒の不登校支援についての効果を検討した。

方法

1.　大学生支援者

大学生3年生6名（男性3名，女性3名）で平均年齢は21．3歳であった。

2.　対象者

小学3年生から中学3年生，のべ74名であった。1回当たりのキャンプ参加人数は，約15名であった。

3.　実施期間

X年9月からX+1年2月の計6回であったが，大学生が参加したキャンプは，X＋1年1月までの5回であった。1回の実施日は，2泊3日であり，参加者は，途中参加も可能であった。

4.　プログラム構成

全体の構成は，主催者側が企画する企画事業とフリータイムであった。下記にプログラム例を示す。

	6:20		12:00		18:00		22:00
1日目			受付	出会いの集い	夕食	企画事業　フリータイム	就寝
2日目	起床	朝食・清掃 企画事業	昼食	企画事業	夕食	入浴　フリータイム	就寝
3日目	起床	朝食・清掃 企画事業	昼食	解散			

図1　キャンププログラム例

5.　評価

大学生の支援について効果評価は，小学校教員免許，学校心理士および臨床心理士の資格を有し，スクールカウンセラーとして，学校にも行っている者が行った。また，大学生の指導教員でもあり，日頃から大学生に助言・指導を行っている。評価者は，ほぼ毎回，夜にキャンプ地に行き，大学生や参加者の様子を観察した。また，参加者を就寝させた後の指導者ミーティングに参加し，その日の様子を聴き，ミーティング終了後に大学生だけの打ち合わせを実施した。その中で，参加者の様子や大学生の関わり方についての助言を行った。

6.　キャンプ中の大学生の役割

キャンプでは，参加者を3班に分け，各班に大学生が2名ずつ配置され，参加者と同じように事業に参加をした。生活時間も参加者と過ごしており，キャンプ期間中は，班の参加者とともに行動した。

全体評価

1.　キャンプ期間における参加者の様子およびプログラム内容について検討

参加者は，大学生との関わり，企画事業および友だちとの関わりなどを楽しみにしていた。企画事業の中には，体力を使うものも含まれていたが，参加者は，何とかやり遂げていた。また，もっとも参加者が楽しみにしていたのは，フリータイムの時間であった。フリータイムは，参加者が自由に時間を使うことができ，自分たちのやりたいことができた。例えば，体育館でボール遊びをする者や部屋で友だちと話しをする者など様々であった。この時間は，企画事業とは別の意味で参加者にとって楽しい時間になっており，キャンプの疲れを癒し，友だちとの交流の場になっていた。この，フリータイムの時間を設定することは，このようなキャンプでは，珍しいと思われる。

不登校児童生徒を対象としたキャンプのみならず，このようなキャンプのプログラムの大半が，企画された行事で構成され，残りの時間がフリータイムというのが多い。これは，短いキャンプ期間を通して，少しでも様々なことを体験することで，より多くのことを学んで欲しいという願いから，プログラム構成がなされていると思われる。確かに，企画事業は，日常生活では体験できないことを体験することができ，参加者にとっては，貴重な経験となる。そして，事業を通して，友だちとの関係や達成感といったことも経験することができ，意義のあることである。しかしながら，企画事業は，企画者側が事業の計画から実行までを行ってしまうため，参加者である子どもたち自身が主体的に考え，自主的に動くという面が少なくなる可能性がある。この点が，企画事業の課題の一つだと思われる。

一方，フリータイムは，参加者が自分たちのやりたいことができ，それぞれのペースに応じて時間を過ごすことができる。また，無理に人と関わる必要もないため，身体的および精神的に疲れを感じれば，休憩を取ることができる。これらの点がフリータイムの長所である。しかしながら，課題もある。フリータイムは，自由に時間を過ごすことができ，自分のやりたいことだけを行うため，幅広い活動がしにくくなる。また，様々な人と関わらず，自分と気のあった人とのみ行動することで，偏った人間関係になることも考えられる。これらの点は，フリータイムの課題であり，運営上，注意しておくことが必要な点である。だが，問題点があるにせよ，フリータイムの時間は，参加者にとっては，楽しい時間であることは間違い。中には，フリータイムをもっとも楽しみにしている参加者もいる。この「楽しい」ということを参加者が感じることが，キャンプを行う上でもっとも大事なことではないかと考える。

不登校になった児童生徒は，個人差はあるにせよ，何らかの「しんどさ」，「悲しさ」，「怖さ」そして，「苦しさ」などを感じている。そのため，「楽しい」ということを感じることが少なくなっていると推測される。「楽しい」という感情は，何事にも前向きに考えたり，とらえたりするためには，必要なものであると考える。日常生活では，人と関わることが「しんどい」と感じていたとしても，キャンプ期間だけは，「しんどくない」という気分になれば，日常生活の中でも，「しんどさが」軽減される可能性がある。このような点から，フリータイムは重要な要素として考えられる。しかしながら，参加者だけで行動すると，個人個人が，自分の意見を主張し合い，時には，意見の相違から喧嘩になることも考えられる。このような事態を避けるために，大学生スタッフが必要になってくる。

2.　大学生スタッフと参加者との関わり

キャンプ期間中，大学生スタッフは，ほぼ全ての時間を参加者とともに行動する。企画事業をはじめ，フリータイム，入浴といったことも一緒に行動するため，大学生スタッフは身体的・精神的に非常に疲れると思われる。食事や就寝場所も同じであるため，まさに寝食をともにする「仲間」になる。これは，1回だけでなく，大学生がキャンプに参加するときは，毎回同じである。そのため，参加者も大学生の顔と名前を覚え，親しく話ができるようになる。

回数ごとで見ると，第1回目は，大学生と参加者との間にかなり心理的距離があった。本論文での心理的距離とは，相手のことを思いやり，理解することとする。1回目は，大学生も参加者にどのように関わっていいのか分からず，戸惑っていた部分が大きい。また，不登校児童生徒ということで，関わることに必要以上に敏感になっていたことも心理的距離ができた要因として考えられる。一方，参加者も顔見知りの参加者だけでないため，参加者同士でも心理的距離があった。このような点から1回目のキャンプは，大学生と参加者との間に心理的距離があったと思われる。第2回目では，1回目と比べて多少は，大学生と参加者との間の心理的距離は，縮まったと思われるが，まだ，よそよそしさが感じられた。しかし，大学生スタッフ間の動きは，1回目と比べ見違えるように良くなった。1回目は，大学生同士がかたまって行動することが多く，参加者と過ごす時間が短かった。しかし，2回目は，参加者と一緒に行動することが多くなり，参加者との会話も増えていた。また，参加者も大学生に話しかけることが多くなっていた。第3回目は，さらに，大学生との心理的距離が縮まっていた。キャンプに参加する参加者の中には，連続して参加する者もおり，回数を重ねるうちに，自然と大学生と仲良くなっていた。そのため，大学生と参加者との間に少なからず信頼関係が築かれ，心理的距離が縮まったものと考えられる。さらに，第4回，第5回目は，参加者同士でもめ事が起こっても，大学生が慌てることなく対応することができ，大学生と参加者との心理的距離は，かなり縮まっていった。

また，大学生にキャンプについての感想を聞くと，第1回目，第2回目は，楽しいけど疲れたという感想が多かった。しかし，第3回目以降は，疲れたという感想がなくなった。これは，身体的には，疲れているが，精神的な疲れがなくなってきたということを意味していると思われる。今回のキャンプで，大学生がもっとも気をつけなければならないのは，参加者の安全確保である。次に，参加者の体調管理である。このことは，野外活動を行う上で重要なことであるが，安全確保や体調管理をする者は，精神的に大変疲れる。大学生は，キャンプを統括する立場ではないが，もっとも参加者に近い存在であるため，常に気を配っておく必要がある。しかしながら，第1回，第2回目は，大学生自身がキャンプの環境や参加者との人間関係が築けていない段階で，参加者の安全確保および体調管理を行わなければならなかったため，心身ともに疲れものと考えられる。だが，回数を重ねて行くにつれ，大学生がいなくても，参加者同士で助け合っていけることができるようになった。そのため，大学生の精神的負担が減少し，疲れたという表現が減ったものと考えられる。

表1　大学生とキャンプ参加者との関わり

	心理的距離	精神的疲労	会話の多さ
1回目	遠い	大	少ない
2回目	遠い	大	少ない
3回目	やや近い	中	やや多い
4回目	近い	中	やや多い
5回目	近い	小	多い

考察

不登校になる要因としては，数多く考えられる。文部科学省(2006)の調査によると友人関係に関する問題が小中学校とも高い値を示している。そして，友人関係において問題を抱えてしまうと，これまでは，友達と話すことに抵抗がなかったものが，抵抗を感じてしまい，さらに，友人関係が悪化することが考えられる。このような，友人関係が不登校の要因として考えられる児童生徒は，同学年の児童生徒と話す機会も少なくなることや話すこと自体に抵抗を感じる者も出てくる。このような点から，大学生がキャンプのスタッフとして関わることは，不登校の児童生徒にとって話しやすい存在であったと考えられる。また，今回のキャンプが年６回実施しされたことも支援活動において重要なことであった。多くのこのようなキャンプは，年1回の開催が多い。中には，年に数回行われるキャンプもあるが，その数は少ない。その中で，1回の開催でも1週間近く実施するキャンプもある。例えば，北九州で実施されているキャンプは，16年に渡り実施され，実施期間も5泊6日である（北九州教育委員会指導第二課，2005)。このキャンプも不登校児童生徒を対象とし，学校復帰を目指しており成果も上げている。このように，年1回のキャンプでも成果を上げているものがある。しかしながら，継続してキャンプを実施することで，継続して参加する児童生徒もでてくる。そして，この継続性が児童生徒を成長させる一つの要因となると思われる。その理由として，まず，継続的に参加することで，その場でしか会えない友達や大学生と継続的に関わることができ，自分の新たな面が発見できる可能性がある。また，家とは違う生活を送るため，自分のことは，自分でする必要がある。朝も6時20分には起床して朝ごはんを食べる。夜は，22時には寝るため規則正しい生活を送ることができる。実際に，参加者は，朝，時間通りに起床し，清掃や朝食を食べていた。保護者に話を聞くと家では，このような生活を送っていないということであった。しかし，キャンプに来るようになってから，家でも朝起きることができるようになったという話を聞いた。このように，キャンプは，生活習慣の改善という効果をもたらす。これを一人で行うことは，難しいことだが，キャンプに参加している友達や大学生の支援があれば行うことができる。大学生は，起きられない参加者を起こして，朝ごはんを食べるように促す役割を担う。このように，大学生の関わりによって，参加者の行動に変化が見られる。

大学生の参加者への関わりの基本は，参加者の意志を尊重し，参加者が楽しくキャンプを過ごせるように関わることである。そして，この関わり方には，Axline(1974)が提唱した8原理に基づいて関わることが望ましいと思われる。それは，キャンプが，広い意味で遊びの空間として考えられるからである。その空間の中で参加者は，自分の気持ちや感情を表現する。この自分の気持ちを表現することは，子どもが成長する上で重要な要素として考えられる。東山(2005)は，子どもの精神的健康は，「よく遊び，よく寝る」ことに関係していると述べている。そのため，不登校の児童生徒の精神的健康面を良好にするためには，テレビゲームといった内向的・個人的な遊びではなく，外向的・開放的な遊びが必要になる。また，遊ぶためには，参加者に合わせることのできる相手が必要である。相手に合わせることは，相手の気持ちを感じながら行動することが必要になるため，大変難しいことである。そのため，同学年の子ども達よりも少し年齢が高い大学生の方が相手としては，適していると考えられる。このような点からも，大学生による不登校児童生徒との関わりは，意味のあるものと言える。

さらに，不登校児童生徒との関わりの中で，批判的なものの見方をせず，ありのままに児童生徒を受け入れることが重要になる。不登校の児童生徒でも，活動的で活発な子どもはたくさんいる。このように活発に活動している様子を見ると，これだけ活動できるのであれば，学校に行けるのではないか，あるいは，学校に行かないのは，ずる休みをしているからではないかといった考えを持ってしまう人もい

る。しかしながら，表面的には，活動的でも，心理的な面では，まだまだもろい部分が多い。そのため，不登校児童生徒と関わる際には，評価的な態度で関わるのでなく，無条件の肯定的態度で関わる必要がある。この考えは，Rogers(1986)が提唱している。Rogers(1986)は，個人は自分自身の中に，自分を理解し，自己概念や態度を変え，自己主導的な行動を引き起こすための巨大な資源を持っており，そして，ある心理的に促進的な態度についての規定可能な風土が提供されさえすれば，これらの資源は，働き始めると述べ，自分自身の中に解決する力があるとした。このように参加者自身が，課題を解決する力を身につけられるように支援することが重要である。そして，このような，支援を行えるのが大学生出はないかと考えられる。

しかしながら，大学生による支援にも問題はある。それは，大学生自身が，参加者の気持ちを受け止めるだけの訓練をしていない点である。今回は，大学３年生が，参加者の支援にあたっていた。そのため，大学生自身も未熟な点もあり，関わり方についてもうまくいかないことがあった。そのため，今後は，支援活動を行う前に，ロールプレイなどを実施し，関わり方について訓練をすることが望ましいと考える。このように，問題もあるが，参加者と純粋に向き合えるひたむきさを持っている大学生の支援活動は，参加者に良い影響を与えるものと考える。さらに，大学生自身も様々な経験をすることにより，関わり方や言葉がけを学び，より良い支援者になるものと思われる。

引用文献

Axline, V. M. (1947). *Play therapy*: The inner dynamics of childhood, Boston : Houghton Mifflin. (小林治夫(訳) (1974). 遊戯療法　岩崎学術出版社)

東山紘久　(2005). 遊戯療法論　東山紘久・伊藤良子(編)　遊戯療法と子どもの今　創元社　pp. 11-25.

北九州市教育委員会指導第二課　(2005). 不登校児童生徒療育キャンプ「ワラビーキャンプ」の実践と通して　臨床心理学　金剛出版　46-50.

文部科学省　(2005). スクールカウンセラー活用事業補助資料.

文部科学省　(2006). 生徒指導上の諸問題の現状について(概要).

Rogers, C. (1986). A Client-centerd/person-centered approach to therapy. In *Psychotherapist's Casebook*, Kutash, I. & Wolf, A. (Eds.), New York : Jossey-Bass. pp. 197-208.

Study of non-attendance at school support by the university students.

Takehiro Tamaki

This study examined effect of non-school attendance support by a university student. A scholar of object is 74 people in a primary schoolchild and a junior high student.
I carried out the support by camping for a truant. The university student who participated to support is three men and three woman.

As a result of examination, it was suggested that support had an influence to be good for children on a university student. In addition, it was suggested that a university student had a good influence.